

Joyama

通信 Joyama News

福岡教育大学広報誌

Fukuoka University of Education Campus Magazine

vol.

31

2014 Autumn

特集1
大学改革

学生の英語力向上のための 新たな取り組み

特集2

図書館リニューアル オープン!



福岡教育大学

特集 大学改革

学生の英語 新たな取り

vol.
31 CONTENTS

02 特集1

大学改革
学生の英語力向上のための
新たな取り組み

07 特集2

図書館リニューアルオープン!

10 福教大NEWS

14 授業紹介

消費生活論(奥谷めぐみ講師)
生徒指導の理論と実践A
(高松勝也准教授)

16 研究室・講座紹介

天野真二研究室/生活総合教育講座

17 サークル紹介

アメリカンフットボール部LIONS
てくてく とことこ(ボランティアサークル)

18 社会連携 連載第9回

20 福教大卒OB・OG

北九州市立高須小学校教諭
齋藤 由梨絵さん

福岡県立福岡中央高等学校教諭
内藤 浩二さん

22 TOPICS

東京オリンピック・パラリンピック競技大会
組織委員会と連携協定を結びました!
表紙モデルの福教大生☆
学生広報スタッフ大募集

23 キャンパスからの便り

前号より、特集で大学改革について紹介していますが、大学改革特集第2弾の今号では、学生の英語力向上のための新たな取り組みを紹介します。

■ 教育の国際化における現代的課題

今日のグローバル化した社会情勢においては、国際的に通用する能力や資質の獲得は、教育者や指導的な役割を果たす人材、高度な専門的能力をもつ人材の養成にとって、ますます必要不可欠なものとなっており、文部科学省は、学生や研究者の国際交流の促進、質の高い外国人留学生の受入の増加を戦略として掲げ、スーパーグローバル大学等事業、トビタテ!留学JAPAN等の留学生交流の強化・充実等により、将来世界で活躍できるグローバル人材の育成を図るために、大学教育のグローバル化を強く推進しています。

学校現場においても平成23年度からの学習指導要領により、小学校での外国語活動が実施され、また国際的な背景を持った児童・生徒も増加してきています。それゆえ異文化への高い理解や多言語を駆使することが教員に新たに求められる資質となってきています。

■ 本学の国際化に向けた四つの戦略

本学は、教育に関する教育・研究を総合的に行う九州地区の拠点大学として、有為な教育者を養成するとともに、地域及び我が国の文化の発展に寄与することを目指し、東アジア諸国をはじめ、世界の教育機関との教育・学術交流を通して「大学の国際化」を図ることを理念のひとつとしています。

その理念の下、高度な専門的能力を持つ人材の育成を通じた教育・研究の国際化、国際理解等の現代的課題に関する研究の推進、地域文化の向上や国際交流に指導的役割を果たすことができる人材の養成等を教育、研究、社会貢献の目標とし、留学生の受入・派遣、学生交流事業、国際コンソーシアムへの参加等の活動を行っています。

平成24年には、教育の国際化における現代的課題や本学の理念を踏まえ、中長期的な視点でその方向性を示すものとして、本学の国際化に向けた四つの戦略を策定したところです。

1) 教育の国際化

本学は、教育の国際化のために、国際化に対応したコミュニケーション能力や自己表現能力をもった国際的な水準で活躍できる人材を養成することを目指す。このため、学士力の全体的な向上を図るとともに、英語等で学べる環境の整備を進め、多言語ができる人材・教育者の養成に努める。

2) 研究の国際化

本学は、研究の国際化のために、研究の水準の全体的な向上を図り、国際的な研究の発展を目指す。このため、海外研究の奨励、海外との共同研究の支援等に努める。

力向上のための 組み

3) 国際交流の活性化

本学は、海外の教員養成機関等との連携を深め、優秀な留学生の確保、本学学生の海外留学の促進を図るとともに、学術の交流等国際交流の活性化を目指す。

4) 社会貢献の国際化

本学は、教員養成大学としての実績と経験を国際的な社会貢献活動に結びつけ、東アジアや世界の文化の発展に貢献することを目指す。

■ 教育の国際化に向けた取組

ここでは教育の国際化に向けた取組として、学生の英語力向上のための新たな取組について紹介します。

英語習得院(ELI)(仮称)の創設

学校現場で実践可能な英語コミュニケーション能力を身につけた教員(小学校教員を中心に)を養成するため、選修、専攻、コースの枠を超えた全学共通の実践的な英語教育を担い、グローバル化に対応する教員養成の強化を図るために、「英語習得院(ELI)」を平成26年度に創設しました。

英語習得院(ELI)では、以下のプログラムを提供し、学生の英語力向上に向けた取り組みを進めていきます。

○英語が使える小学校教員養成講座

対象:初等教育教員養成課程を中心とした全ての学生

目標:授業以外の場でも子どもたちと英語でコミュニケーションがとれる「聴く」「話す」基礎的運用能力を習得

○留学のためのTOEFL講座

対象:留学を希望する全ての学生

目標:協定校が設定しているTOEFLスコアー(iBT70以上)

○海外短期英語研修

なお、英語習得院(ELI)は、平成27年度に本格実施する予定です。平成26年度は試行として、前期3ヶ月間 週2回 全32回の講座を実施、後期は3ヶ月間 週2回 全24回の講座を実施し、本格実施に向けた体制整備、カリキュラム等の制度設計を進めています。



英語が使える小学校教員養成講座



留学のためのTOEFL講座

「英語習得院(仮称)」の開設について

理事(国際交流・社会連携担当) 榎崎 洋二郎

かねてから云われていることですが、日本人はその多くが公教育の中で、中・高・大と10年間も英語教育を受けているのに、殆んどの大人が日常的な英会話すらまともにできません。現状では、大多数の大人(私を含めて)が、街頭でネイティブスピーカーから話し掛けられると、周章狼狽して意味不明の行動をとってしまうことは、残念ながら事実と言わざるを得ません。

こうした状況を打破し「英語が使える日本人」の育成を図ることを目的として、既に平成23年度から小学校の5、6年で週1コマの「外国語活動」が必修化されていますが、担当教員(小学校ではクラス担任)の指導力量の充実・強化が大きな課題となっていることは周知のとおりです。

本格実施から4年目になりますが、現在の「外国語活動」の実施状況を見たとき、果たして児童の「コミュニケーション能力の素地を養う」という目標は十分に達成されているでしょうか。せっかくALTが配置されても、「担当教員がALTと意思の疎通を図ることができないために授業が効果的に進められない。」とか、極端な場合には、「ALTに丸投げになっている。」といった指摘もあるようです。

このような状況の下で、国は昨年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革」として、次期の学習指導要領改訂では、小学校英語を、中学年で「活動型」を週1~2コマ、高学年で「教科型」を週3コマと抜本的に拡充強化し、併せて、中、高においても、英語教育の高度化を図るとの方針を明らかにしました。

現行の「外国語活動」についても、人材の確保や教員の指導力量の向上の面で対応が十分とはいえない状況の中で、国は、この小学校英語の拡充強化を、平成30年度から段階的に先行実施、平成32年度からは全面実施するとしています。

公立学校教員の人事や研修に責任を負う都道府県や政令市の教育委員会は、この小学校英語の拡充強化に向けての教育諸条件の整備が本当に間に合うのかと、危機感を募らせています。教員採用についても、従来の募集活動領域を全国規模に広げて、指導力量の高い若手教員の確保に奔走する教育委員会も出てきました。

英語力を巡る今日の小学校教員の状況、これは我が国において一定の教育を受けた青壮年一般について言えることではないかと思いますが、彼らは、中・高・大学での英語教育の成果として、語彙力、英文法・英作文や英文読解の力、更にはリスニングの力についても(センター試験効果もあるのでしょうか)一定のレベルにあるようですが、スピーキング力(状況に応じた発話力)が決定的に弱い、とされています。

小学校教員の英語力に関する県の教育委員会等、いわゆるデマンドサイドの考えは、はっきりしています。少なくとも基礎的なコミュニケーション能力、リスニングとスピーキングの基礎・基本を身に付け、日常会話のレベルで、臆することなく子ども達に話し掛け、ALTとフランクに会話をするのできる人材が欲しい。現状では、優秀な人もいますが、全体としてみれば、到底そのレベルには達していない…と。

こうしたデマンドサイドの思いは、いろいろな形で、教員を希望する学生たちにも伝わっているのでしょうか。これは本学に限らず、広く全国的にも認められることですが、小学校教員を志す学生が、英語によるコミュニケーション能力を身に付けたい、或いは更に高めたいという目的の下に、もちろん採用試験対策も含めて、いわゆるダブルスクールの形で語学学校に通ったり、或いは、教員として就職した後に、ALTとのコミュニケーションが図れないといった悩みを抱え、自分が要求レベルに達していないという自覚の下に、勤務時間外に語学学校に通うといったケースも少なくないようです。こうした本人の努力は多とすべきですが、これには多くの労力と時間を要するだけでなく、多大な経済的負担を伴います。

今後の小学校英語の拡充強化に向けて、県の教育委員会等関係行政機関は、現職教員の研修の抜本強化を図らねばならないことはもちろんですが、今日の教員大量退職の時代即ち大量採用の時代において、とりわけ英語について高い指導力量を有する教員の新規採用に全力を挙げるだけでなく、英語に堪能な講師の採用を含め、今後の小学校英語の指導者の確保に向けて、全力を投入することとなるでしょう。

この度、「英語習得院(仮称)」の名の下に立ち上げようとしている各種の取組みは、今後必要となるであろう正規のカリキュラムでの対応に先駆けて、こうしたデマンドサイドのニーズや、本学の小学校教員を目指す学生、そして今現場で「外国語活動」の指導に悩む若手教員の思いに応えるためにできることは何か?本学が国の英語教育改革に直面し「教員養成機能における広域の拠点的役割」を果たす上で、いち早く取り組むべきことは何か?このことが、その発想の基本にあります。

この「英語習得院(仮称)」は、学内に語学学校を設けるような形で、「留学のためのTOEFL講座」、「英語が使える小学校教員養成講座」や海外での短期語学研修等を、課外の学習活動の場として開設するとともに、環境整備として、そこには、英会話講師が常駐するだけでなく、外国人留学生の「居場所づくり」を進めることで、いつでも、誰でも、英語だけでコミュニケーションを図ることのできる環境づくりを進めたいと考えています。

今回の取組みは、本学学生に、大学の正規のカリキュラムの外で、英語によるコミュニケーション能力の強化を中心とする主体的な学びの場を提供するものであり、本学の教育活動に付加価値を付けるものと考えています。講師陣には、ネイティブスピーカーの先生方に加え、民間の語学学校等で永年の指導経験を有する日本人講師も数名招聘し、民間の手法(一人一人の顧客のニーズに応じた英会話訓練等)も適宜取り入れながら、年間を通じて指導を受けられるようにします。

なお、ここでの学習活動の成果については、サーティフィケート(certificate)という形で履修証明を発行する予定ですが、その評価に当たっては、内部的な評価だけでなく、多くの国で活用されているスタンダードテストの結果も活用したいと考えています。

こうした「英語習得院(仮称)」の取組みは、学生たちがこれまでに中・高等学校で学んできた英語教育の成果、そして本学入学後に正規のカリキュラムの中で学ぶ英語教育の成果と相俟って、謂わばこうしたこれまでの正規の学校カリキュラムによって培われた英語力との相乗効果によって学生たちのコミュニケーション能力とりわけスピーキング力(発話力)を開花させようという試みであり、現在多くの学生に立ちほだかる「スピーキングは難しい。」という苦手意識に必ずや風穴を開けることができるものと信じています。

教員を志す多くの学生の皆さんの受講を歓迎します。

マレーシア短期英語研修の実施

英語習得院(ELI)のプログラムの一つとして、8月8日から31日までの24日間、マレーシアのクアラルンプールにおいて短期英語研修を実施し、13名の学生が参加しました。また、この研修は、事務職員の海外研修としても活用し、3名の職員が参加しました。

これまで本学では欧米圏での短期英語研修を実施してきましたが、今後の日本、特に九州の重要なパートナーであるマレーシアで実施しました。マレーシアにおける研修の最大の利点は、マレー系、中国系、インド系など100以上の民族が共生し、言語もさまざまで、共通語はマレー語ですが、国民は幼稚園から英語教育を受けるなど、英語教育レベルは非常に高く、国家戦略として教育の国際化を推進しているため世界中から留学生が集い、将来のグローバルなネットワークを築くのに適した環境です。

参加した学生たちは、授業や寮において世界の留学生と共に学び、生活し、学校の外では地域の人々や地元学生との日常生活を体験するなど、この研修をとおして、英語でのコミュニケーション能力はもちろん、チャレンジ精神、主体性、協調性、適応力、問題解決能力、文化的社会的背景の異なる相手を理解しようとする姿勢、その基礎となる知識などを高める結果となりました。



文化体験

「クアラルンプール短期英語研修」報告

共生社会教育課程 国際共生教育コース 嘉村 颯太

今回の研修に参加した目的は、現在の英語力が通用するかどうかを確認することだった。最初はその目的のことばかり考えていたのだが、実際にマレーシアで生活していく中で様々なことを経験し、心から楽しみながらしっかりと自分の目的も果たすことができた。そしてまた、英語を勉強する目的についてしっかりと考え直すこともでき、私にとってかけがえのない経験となった。

学校での授業は、少人数制で先生たちとの距離がとても近かったことで、英語を話す機会が多かっただけでなく、授業の内容に関しても、英語を勉強するというよりは英語を使って勉強をする、というように感じ、また、自分の英語力で何とかついていけるくらいの高いレベルで授業が展開された。それによって、一生懸命に聞き取ったり、話したりすることに毎日疲れ切りながらも、自分の英語はしっかりと通用するのだと感じることもでき、楽しみながら学習することができた。午後に行われていたResearch Projectは、それぞれが定めたテーマについて自分たちで文献を読み、自分の言葉でそれをまとめ、直接街へ繰り出してインタビューをして発表するという総合力を必要とするものだった。このような活動を私は非常に苦手としているのだが、グループワークであったことで、他のメンバーが積極的に動いてくれてきちんと完結させることもでき、グループのメンバーへの感謝の気持ちとともに、私個人の能力が未熟であるということを改めて思い知らされた。自分は英語の簡単な文章を作る程度しか役に立たなかったが、日本での大学の授業ではなかなかできないそのようなグループワークでメンバーの仕事を見ていると、今後の私にとって参考になる部分が多くあり、語学研修以外の面でも非常にいい経験となった。

また、学校生活以外の面でも、ルームメイトとの会話などから、自分の暮らしている現状や、自分について、そしてまた、違う文化圏で生きている人たちについて多くのことを知ることができた。私のルームメイトはモルディヴから来た人で、彼との会話は、お互い英語が第一言語ではないこともあり、はじめは苦労する点も多くあった。しかし時間が経つにつれて、私は彼の英語を理解できるようになり、彼も私の言葉を理解してくれるようになって、英語で冗談を言い合うこともできるようになった。他のメンバーのルームメイトであるマレーシアの人たちとも、会話を繰り返すうちに相手の話すスピードにもついていけるようになり、相手が伝えたいことをしっかりと読み取り、自分も伝えたいことをうまく伝えることができるようになった。そして、彼ら、彼女らに私のエッセイを見てもらったり、私の英語についての感想を言ってもらったりすることで、私自身の英語がどのレベルのもので、今後どうすればよいかということについても考えることができ、私自身についての理解も深まった。学校の授業へのアドバイスだけでなく、休日にはいろいろな場所へ一緒に行ってくれて、私たちの生活のすべてをサポートしてくれた彼らには感謝してもきれない。

私が英語を勉強する本当の目的とは、そのような人たちと楽しい時間を共有し、意思疎通をしてもっと深い関係を築いていくためなのではないだろうか、と彼らと関わったことで考えるようになった。留学するために必要だから、グローバル社会において英語は欠かせないから、という目的も確かにあるが、それとは別に、自分のモチベーションを高めるような、本当の目的だと私自身が思えるものを見つけることができたこと、それこそが今回の研修で手に入れた一番の財産である。



授業の様子

「クアラルンプール短期英語研修」報告

連携推進課 田淵 鮎子

平成26年8月8日(金)～8月31日(日)、職員として上記研修に参加した。マレーシアでの語学研修は本学初の試みだったが、研修先がマレーシアで良かったと思う点が3点ある。

1点目は、「研修費用の安さ」である。学生から「以前から語学研修への参加を希望していたが、費用の高さから叶わなかった。この研修は比較的安価だったため、ようやく参加できた。」との声があった。このように、参加費用の安さはやはり大きな魅力で、留学や英語に関心を持つ学生がはじめての一步を踏み出しやすかったという点で、本研修には大きな意味があったと言える。

2点目は、「人々の温かさ」である。研修先であるLux International Collegeの方々だけでなく、地元にも親切な方が多いと感じた。Research Projectでは、街中で地元の方にインタビューを行う機会もあったが、どの方もこちらの拙い英語に耳を傾けてくださり、非常に協力的だった。多民族国家であるマレーシアでは、英語が広く話される一方、それぞれの言語を尊重していることから、相手の話を一生懸命聞こうとする温かさがあり、さほど気負わずに英語を話せる雰囲気があるようにも思われた。そのため、間違いを恐れずに、積極的に話しかけることができたように思う。

3点目は、「ゆったりとした空気」である。マレーシアでは、良くも悪くもゆるやかな空気を感じた。約1ヵ月間大きなストレスを感じることなく過ごすことができたのもそのおかげだと思われるし、海外が初めての学生にも比較的なじみやすい国ではないかと考える。

本研修では、職員も福岡教育大学の学生たちと一緒に学び、様々な文化体験をした。その中で、彼らの素晴らしさを再発見することができた。例えば、Luxの方からの要請で、修了式で本学学生による出し物と代表スピーチをすることになったときのことである。連絡を受けたのが修了式の2日前で、Research Projectの発表への準備等も思うように進まない中、学生たちはすぐにミーティングをして役割分担を決め、精一杯取り組んでいた。修了式では出し物として全員で合唱を披露し、スピーチでお世話になった方々への感謝を丁寧に伝えていた。少ない時間の中で現状を把握し、自分たちのできることをやり遂げる彼らの姿は大変素晴らしく、その高い資質は他に誇れるものだと感じた。

また、学生たちの考えを直に聞くことができたという点も、大変良い経験となった。学生に本研修に参加したきっかけを尋ねたところ、「ずっと海外研修への参加を希望しており、今回ようやく参加できた。」という喜びや、「協定留学を目指しており、必要なTOEFLスコアを取得するために英語力を磨きたい。」といった熱意等、一人ひとりの声を聞くことができた。学生たちの考えを知ったことで、もっと彼らの力になりたいという思いが生まれ、留学を目指す学生たちの支援を担当する者として、今後の業務に対する心構えにもなった。

最後に、今回この研修への参加を後押しして下さった全ての皆様に、心から感謝の意を表したい。楽しかったこと、反省すべきこと、大変だったこと等様々だが、マレーシアで体験したことを糧とし、しっかりと今後の業務につなげていきたいと考えている。私自身の英語力には課題が山積していることを痛感したので、この思いを忘れずに学習を継続したいと考えている。



リサーチプロジェクトの様子



日本文化を紹介するプレゼンテーションの様子



伝統衣装体験



伝統楽器体験

特集



学術情報センター

Fukuoka University of Education

図書館

Library

RENEWAL OPEN!!



リニューアルオープン

平成26年10月1日に本学学術情報センター図書館がリニューアルオープンしました。

「静かな環境で読書をする、学習する」という従来の図書館のイメージとは異なり、「学生同士がグループで議論し、知識を求めあい、ともに考える」というような、仲間とともに学修を進めることができる動的な活動の場としての機能が新たに加わり、学生の皆さんの学びの場が広がりました。

今号の特集2では、リニューアルオープン当日に開催された記念式典の様子と、新機能が満載の図書館について詳しく紹介いたします。



リニューアルオープン記念式典を開催 (平成26年10月1日)

平成26年10月1日(水)に、文部科学省研究振興局学術基盤整備室の長澤公洋室長、宗像市教育委員会の遠矢修教育長、宗像市民図書館の長谷川慎館長などの来賓を迎えて、リニューアルオープン記念式典が行われました。寺尾学長より、「本学図書館が竣工したのは昭和40年11月です。48年が経過し、「狭く・暗く・夏は暑い」と、よい評判を聞くことがあまりなかった図書館が、「広い・明るい・快適な」学修空間に生まれ変わりました。新しくなった図書館を大いに活用して、本学のミッションの実現に向けて、更に力強く学術情報基盤を豊かにしていただきたい。」との式辞が述べられました。

来賓を代表して文部科学省の長澤公洋学術基盤整備室長より祝辞が述べられ、来賓紹介、祝電披露、大坪靖直学術情報センター長の謝辞と続き、テープカットが行われました。

テープカット後、音楽教育講座の木村教授と音楽科の大学院生・学部学生による弦楽四重奏の祝典演奏の中、新装開館を心待ちにしていた利用者が次々と入館しました。お祝いに駆けつけてくれた附属幼稚園の園児の皆さんも入館し、新しくなった子ども図書室に入り、思い思いの絵本を手にとっていました。



テープカットの様子

左から大坪学術情報センター長、文部科学省長澤学術基盤整備室長、寺尾学長



祝典演奏とともに入館する附属幼稚園の園児たち



式辞を述べる寺尾学長



新しい子ども図書室で絵本を読む附属幼稚園の園児たち



新図書館の 施設紹介

平成24年度の補正予算で図書館の耐震改修工事が実施されました。
耐震改修はもちろんですが、次の3点をコンセプトにして改修を行いました。

1. アクティブ・ラーニングを活性化するための整備
2. 学術情報(コンテンツ)と情報機器(システム)の統一的なサービス提供を可能とする環境整備
3. 教員養成大学の図書館としてのサービス機能の強化



1 アクティブ・ラーニングを活性化するための整備

A 「ラーニング・commons」の新設

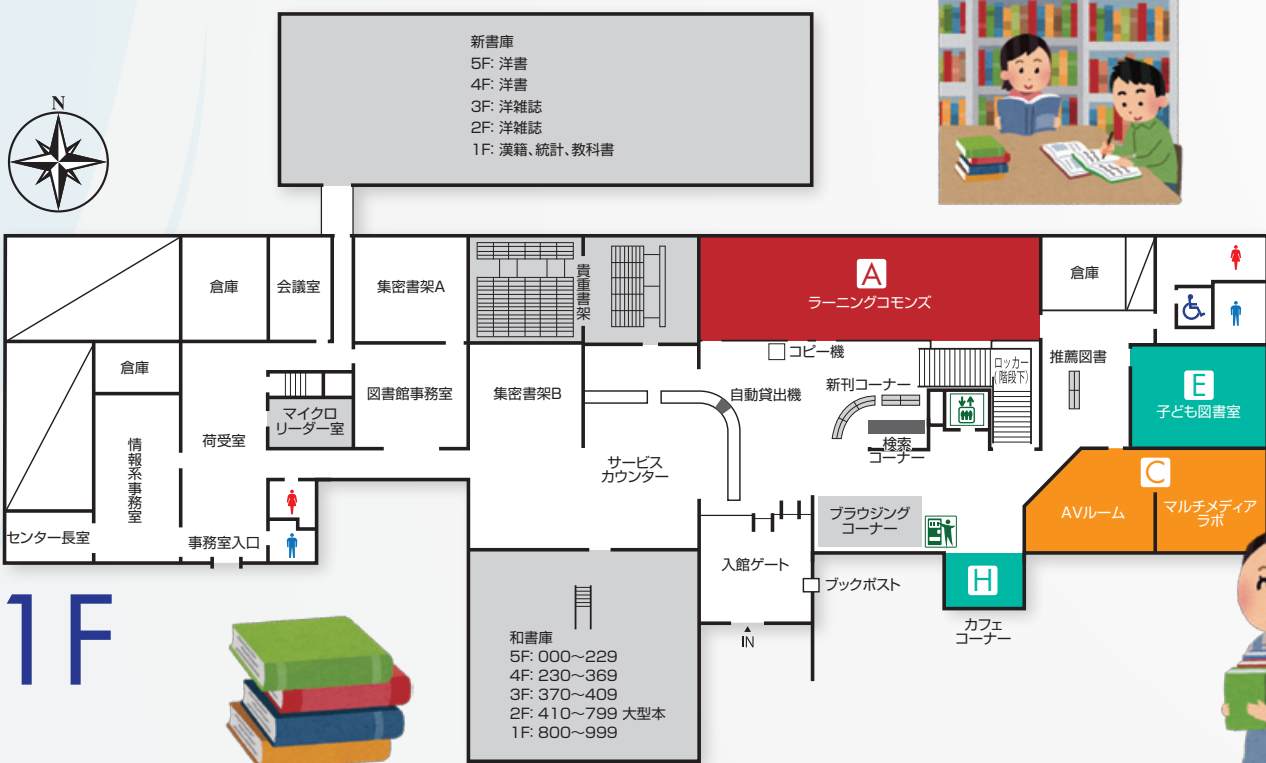
「commons」とは「共有のスペース」を意味します。「ラーニング・commons」は、学生がともに学ぶ共有のスペース、つまり学生同士が議論し知識を求めあい、ともに考える学習空間です。複数の学生・研究者が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」です。仲間とともにディスカッションしたり、他の学生の学習活動を見たりしながら、各自の学びを広げ深めていってほしいと思います。可動式のホワイトボードや無線LAN環境(Free Spot)を設置しています。また、自分たちで机や椅子を動かして場を自ら作りかえて、学びの姿を発信するスペースでもあります。



工夫して場を構成!ラーニング・commons

B 「グループ学習室」の増設

旧図書館には2つのグループ学習室がありました。新図書館では3つに増設され、またガラス張りの明るい空間となりました。利用方法はこれまでどおりで、図書館カウンターにて申し込みを受け付けます。今後は図書館ホームページ(Web上)で予約受付ができるように計画中です。



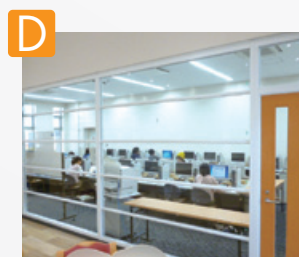
2 学術情報(コンテンツ)と情報機器(システム)の統一的なサービス提供を可能とする環境整備

平成24年度の「附属図書館」と「情報処理センター」の組織統合により「学術情報センター」が発足しました。今般の改修工事に伴い、組織だけでなく「建物」も統合され、一つのカウンターで図書館サービスと情報システムサービスの受付が行えます。

また、情報システム館(旧情報処理センター)のパソコン教室が図書館に移設され、資料を手にパソコンに向かって学習ができる場が広がりました。共通講義棟のパソコン教室は9時から17時の利用が原則となっておりますが、図書館設置のパソコン教室については、授業利用時を除いて、図書館の開館時間中は全て利用できます。平日は朝8時半から21時半まで。土日祝日は朝10時半から17時までパソコン教室が利用できます。(情報システム窓口/平日8時半から17時まで)



マルチメディアラボ(1階)



図書館設置のパソコン教室(2階)

3 教員養成大学の図書館としてのサービス機能の強化

E 「子ども図書室」

広く、明るい子ども図書室となりました。これまでどおり、附属幼稚園の園児を対象にしたイベント、読み聞かせ練習などに使用できます。利用申し込みは不要で、いつでも入室できます。イベント等を企画・実施する場合は、図書館カウンターにて相談を受け付けています。



広く明るくなった子ども図書室

F 大量の資料保存を可能にする「電動集密書架」の新設

国内雑誌（和雑誌）、研究紀要等は、2階の電動集密書架に配置されています。軽い力で動かせる最新式の集密書架です。

また、教科書室（貴重書庫）にも電動集密書架が入っています。教科書室（貴重書庫）のご利用につきましても、これまでどおりカウンターにて申し込みを受け付けています。

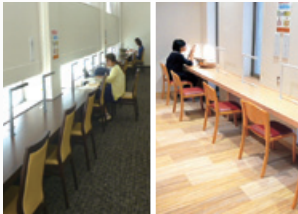


電動式集密書架

G 「研究個室・カウンター式閲覧スペース」の新設

“個の学び”や“研究”を支える環境として、教職員や大学院生を対象とした「研究個室」3部屋を新設しました。図書館カウンターで利用申し込みの上で利用いただけます。

学生さんを始め図書館利用者の方が集中して学習に取り組める「カウンター式閲覧机」も2階西側、東側にそれぞれ新設しました。個の学びが深まっていく場になることを期待しています。



カウンター式閲覧机
(研究閲覧室) (開架閲覧室)



教職員・大学院生用の研究個室

H 「カフェコーナー(休憩スペース)」の新設

学習・研究に取り組んだ皆さんが、ほっと一息できる“飲み物OK”のスペースが1階に新設されました。自動販売機を設置しています。図書館資料を持ち込んでページを開いたり、飲み物を閲覧室・開架室に持ち込んだりすることはできませんが、長時間の学習をする際の休憩にご活用下さい。



新しく快適な空間となった学術情報センター図書館を大いに利用していただき、利用者の皆様の学習・研究が活性化していくことを願っています。



オープンキャンパス2014を開催しました

福岡教育大学では、7月26日(土)にオープンキャンパスを開催しました。

今年も天候に恵まれ、朝早くからたくさん的高校生や保護者の方など、3050人ものお来場者をお迎えました。

オープンキャンパスでは、大学説明会のほかに各コース等の紹介や体験授業、在学生による個別相談など、今年度も多彩なイベントが学内各所で開催されました。

3回行われた大学説明会では、毎回キャンセル待ちがでるほど盛況で、寺尾学長より「高校生へのメッセージ」と題した話もあり、参加した高校生や保護者の皆さんが、熱心に耳を傾けている姿が見受けられました。また、大学での学びを体験していただく体験授業では、実験の様子の紹介や教員と学生による室内合奏などもあり、どの教室もたくさん的高校生や保護者の皆さんで賑わっていました。在学生による相談コーナーでは、談笑を交えつつ和やかな雰囲気の中で、高校生からの質問に在学生が答えました。また、キャンパス内の各所でも在学生が案内や説明などに活躍しました。

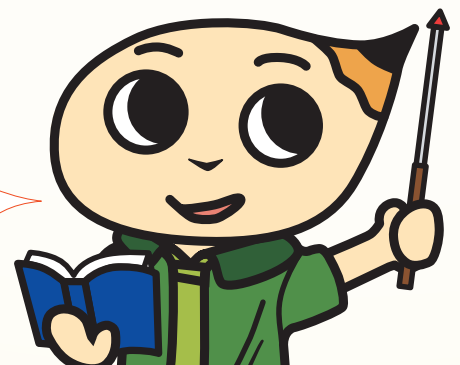
当日は、文化系・運動系ともにサークル活動の練習の様子も公開しました。中庭等でダンスや演奏を披露するサークルもあり、大いに盛り上がりました。



今年度も、アンケートにご協力いただいた方に、本学オリジナルグッズを配布しました。これを機に、本学により親しみを抱いていただけたら幸いです。

みなさまからお寄せいただいた意見を踏まえ、来年度以降も、さらに進化した福教大オープンキャンパスにできるよう、スタッフ一同尽力いたします。

多数のご参加、誠にありがとうございました。



福岡教育大学未来奨学金授与式を行いました

平成26年7月30日(水)、本学第一会議室において、平成26年度福岡教育大学未来奨学金授与式を執り行いました。

平成24年度に寺尾学長により提唱され、創設された本学独自の給付型奨学金である「福岡教育大学未来奨学金」は、本学の理念である有為な教育者の養成及び教育・学術交流を通して国際化を図ることを目的としており、今年度で3回目の授与式となりました。未来奨学金には「学業成績優秀者奨学金」と「国際交流協定校派遣支援奨学金」の2つがあり、今年度は学業成績優秀者として20名の学生が奨学金を授与されました。

授与式では、奨学生証及び奨学金の目録が授与された後、寺尾学長から「奨学生の皆さんには、本奨学金の趣旨に則り、学校教育現場、あるいは地域社会等で指導的役割を果たし、活躍する人物となることを期待しています。」との激励の言葉が贈られました。次いで、学業成績優秀者奨学生を代表して初等教育教員養成課程国語選修3年の亀澤里奈さんから「支援して下さる方々への感謝の気持ちを忘れず、教師になるという夢に向かって日々努力します。」との謝辞と今後の抱負が述べられました。

なお、「国際交流協定校派遣支援奨学金」については、7名の奨学金授与予定者がおりましたが、いずれも、日本学生支援機構の海外留学支援制度(短期派遣)奨学生として採用されたため、本学規定により、今年度は「学業成績優秀者奨学金」のみの授与となりました。



学業成績優秀者奨学生と寺尾学長

福岡アジア文化賞25周年記念事業・学生セミナー “私の国際協力”に本学学生が参加しました

平成26年8月7日(木)、アクロス福岡にて、福岡アジア文化賞25周年記念事業・学生セミナー「中村哲氏と語る“私の国際協力”」が開催され、本学からは国際交流サークルKIZUNAの学生が参加し、意見交換や発表を行いました。

本セミナーは、2013年の福岡アジア文化賞大賞受賞者で、パキスタンやアフガニスタンという異境の地で30年以上にわたり医療や民生支援の活動を続けている中村哲氏を講師に迎えて開催されたもので、中村氏による講演や学生による発表、ディスカッション等が行われました。

第一部では、中村哲氏より「国際協力に従事して30年～若い人たちに伝えたいこと～」をテーマに、参加者に向け、自身の経験に基づいた講演が行われました。

講演後には、セミナーに参加した学生の中から、九州大学、西南学院大学、福岡教育大学の学生3組による「私の国際協力」をテーマとした自身の国際協力についての発表が行われました。本学から参加した国際交流サークルKIZUNAは、留学生との交流や言語学習、書道や着付け等の日本の伝統文化、ひな祭り等の日本の伝統行事を取り入れた留学生との交流活動を紹介しました。

第二部では、参加学生が自身の国際協力経験や今後の参加予定等により3グループに分かれ、所属大学や年齢等が異なる参加者と国際協力に関する意見交換を行いました。

意見交換を終え、互いに刺激を受けた参加者に対し、中村氏からは、様々な挑戦を行う中で失敗しながらも自分にできることを見つけていってほしい、と若い世代へ向けてのメッセージが送られました。質疑応答を経て、最後には中村氏を囲んでのアフタートークが行われました。

セミナーに参加した学生にとっては、豊富な国際経験をもつ講師の講演を聴くだけでなく、直接会話することができる貴重な経験となり、国際協力や自身の今後の活動について一層深く考える機会となりました。



国際交流サークルKIZUNAによる発表の様子

第9回宗像地区教育関係者合同研修会を開催しました

平成26年8月7日(木)に、本学アカデミックホールにて「第9回宗像地区教育関係者合同研修会」を開催しました。猛暑の中、宗像市・福津市教育委員会および学校関係者、本学関係者を合わせて約160名の参加がありました。

開会行事では、寺尾学長から「本学の連携実績は、宗像地区との連携が出発点になっていることは言うまでもありません。教員養成の広域拠点大学として、宗像地区での連携を原型として捉えつつ、県内に連携の幅をさらに広げていきたい。」との挨拶がありました。

第1部では、「平成23-25年度概算要求特別経費プロジェクト成果報告および今後の課題」と題し、特別経費プロジェクト「実技教育支援コーディネーターの養成と配置効果の科学的検証」に関する説明と、事業終了後に宗像市が配置している学力向上支援教員制度の仕組みや課題点について、本学美術教育講座の松久准教授と宗像市教育委員会の正路指導主事による報告が行われました。

第2部では、「美術教育講座が取り組む他の事例紹介及び宗像地区との今後の連携の在り方」と題して、松久准教授による事例紹介に続いて意見交換が行われました。実技教育支援コーディネーターや学力向上支援教員制度に対する質問、また他教科での研究連携の可能性など、活発な意見が交わされました。



松久准教授による事例紹介



会場の様子

ユネスコスクール・ESD研修会in大牟田を開催しました

平成26年8月26日(火)に、オームタガーデンホテル(福岡県大牟田市)にて、大牟田市教育委員会と共催で「ユネスコスクール・ESD研修会in大牟田『みんなで語り合おう、ESDで育む子どもたちを!』」を開催しました。

この研修会は、大牟田市教育委員会が主宰し結成された「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業」コンソーシアムが文部科学省より認定され、構成団体の一員として本学が、またコーディネーターとして本学教員が参画していることから、共同開催するに至ったものです。全国各地からESDに関わる学校関係者や教育関係者等、約160名の参加がありました。

第1部は本学主催で「ESD研修会」を開催しました。

大牟田市教育委員会学校教育課古賀信弘指導主事による「グローバル人材の育成に向けたESD推進事業」に関する説明に続いて、本学石丸哲史教授による「グローバル・アクション・プログラムにおけるESD実践の方向性」と題した基調講演を実施しました。その後、「ESDの質を高めるために」をテーマとして3名の講師によるミニ・レクチャーとして、東京学芸大学成田喜一郎教授、宮城教育大学及川彦彦協力研究員、そして福岡教育大学唐澤重考准教授による講演を行いました。

第2部は大牟田市教育委員会主催で「ユネスコスクール実践交流会」が開かれ、「環境学習」「地域連携」「福祉学習」「世界遺産・地域学習」の4つの分科会において、それぞれ2校による実践発表と質疑応答、その後、奈良教育大学加藤久雄副学長による総括がありました。

研修会や実践交流会を通して、改めてESD活動の重要性を認識すると同時に新たな視点を得たことで、ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUivNet)の一員として、本学の今後のESD活動に役立てて参ります。

※ESDとは

ESDはEducation for Sustainable Developmentの略で、「持続可能な開発のための教育」と訳されています。

今、世界には環境、貧困、人権、平和、開発といった様々な問題があります。ESDとは、これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です。

つまり、ESDは持続可能な社会づくりの担い手を育む教育です。



研修会の様子

本学の学生が「飯塚新人音楽コンクール」で入賞しました

第33回飯塚新人音楽コンクール(飯塚文化協会飯塚・朝日新聞社ほか主催)の本選が、6月8日(日)に福岡県飯塚市のイヅカコスモスコモンで行われ、本学芸術課程音楽コース1年の折居吉如さんがピアノ部門で第2位に入賞しました。

同コンクールは秀れた新進演奏家の発掘育成と地域音楽文化の充実を目的として毎年開催され、若手音楽家の全国的な登竜門とされています。

折居さんの指導に当たり、また審査員を務めた本学音楽教育講座の武内俊之准教授からは、「全国の芸大や音大から優秀な参加者が集まるこのコンクールで、非常に素晴らしい結果だと思います。本学音楽コースに対する社会の期待に応える成果でもあり、今後もますます頑張っていきたいです。」とのコメントがありました。



折居吉如さん
(第33回飯塚新人音楽コンクールにて)

本学附属久留米中学校で中村哲氏講演会を開催しました

9月3日(水)、本学附属久留米中学校において中村哲氏講演会を開催しました。中村氏は2013年の福岡アジア文化賞大賞受賞者で、パキスタンやアフガニスタンという異境の地で30年以上にわたり医療や民生支援の活動に携わっています。

講演会は「アフガニスタンに生命の水を 国際医療協力の30年」をテーマとして開催され、次代を担う青少年が直接世界の知性に触れ、異なる文化や歴史、生き方を学び、世界に目を向ける機会とすることを目的として開催されました。

講演会では、中村氏が長年にわたりアフガニスタンやパキスタンという地における医療や社会基盤施設建設に携わってきた経験をもとに、住民が安定した生活を送ることができる環境回復の具体的な過程が中村氏自身の言葉や写真を用いて語られました。

講演の中には、筑後川に江戸時代からある「山田堰」という技法を取り入れた用水路建設が、遠いアフガニスタンの地で応用されているという話も登場し、筑後川を身近に生活している附属久留米中学校の生徒にとっては、非常に興味深い内容でした。

中村氏は生徒からの質問にも熱心に回答してくださり、「活動の原動力は何か」という質問に対しては、「現地の人が必死に取り組む姿を目の当たりにすると何とかしてあげたいという思いが自然とわいてきます。自分のできることをし、力を貸したくなるのが普通の人間だと思います。みんなのために何かしてあげたいという自然な思いが原動力になっています。」と回答し、国際貢献は肩肘を張って取り組まなければならないものではないということを教えてくださいました。

当日は生徒や保護者ら約390名が会場に集まり、講演に熱心に聞き入っていました。生徒にとっては自身の将来を考えることにもつながる、大変貴重な機会となりました。



講演の様子



会場の様子



消費生活論

家政教育講座 講師 奥谷 めぐみ



教員プロフィール
奥谷 めぐみ
(おくたに めぐみ)

東京学芸大学大学院博士課程修了。
専門は、生活経営学、消費者教育。2013年に福
岡教育大学着任。

消費者としての意識

身近な商品やサービスをめぐるトラブルや
悪質商法等はニュースや社会的問題として
日々取り上げられていますが、学生には縁遠く
感じる課題です。

この授業では、その消費生活をめぐる課題
への関心を高め、消費者としての権利や責
任、事業者の立場から物を見る視点、子ども
が自立した消費者になるためには、どのような
教育が必要か、体験的に学ぶことを目的とし
ています。

体験する、価値を共有する

消費生活は意思決定の連続であり、個々
人の価値が強く影響していることを理解する
ために、ワークショップによる学習を取り入れ
ています。

例えば、消費者問題の実例を挙げ、「何故
この問題が発生したのか」、「どのようにすれ
ば防ぐことができたか」といったように、こちら
の問題提起に対して学生たちは模造紙を囲
みながら議論を重ねます。広告についてター
ゲットは誰か、どのような印象を与えるか、何が
書かれているか、多角的な視点で批判的に
読み取ったり、地元の消費生活センターや弁
護士の方の講和を聞いたり、企業の取り組
みを見に行ったり、と体験的に学ぶ中で、私
たちの「購入」は市場に残る企業を選ぶ一票
であることに気がきます。



授業内のワークショップの様子

「商品を購入する際、どのような視点を重視するか」という問いに対して、カードを使ってランキング付けを行いました。下の図はその際のランキングと意見を集約したものです。

消費者として「発信」する

消費者は保護される権利を持つと同時に、
社会的な責任を果たすことが求められて
います。

そこで、最終課題では「発信」する消費者を
育てるために何が必要かを考え、対象を決め
てワークショップを提案します。教室での授
業、地域活動、企業の研修等、場面は問いま
せん。最も適切な手立てと内容を検討するた
めには、受講対象者の消費生活上の特徴
(児童・生徒対象の場合は発達段階)、消費

生活課題の動向や時事的な課題に目を向け
る必要性があります。衣食住生活を消費生活
の視点から総合的に捉えること、他者と価値
を共有することの必要性を理解し、情報を積
極的に受信・発信できるアンテナをもって欲し
いと考えています。



消費者教育を広めるための教材、ワークショップづくり
自分たちの関心を持ったテーマに合わせて、対象を設定し、実際に
授業や社会教育の場で実践するワークショップや教材を提案しま
す。フェアトレードに関心を持った学生が作りました。

生徒指導の理論と実践A

教職実践講座 准教授 高松 勝也



教員プロフィール
高松 勝也
(たかまつ かつや)

兵庫教育大学大学院学校教育研究科学校教育専攻教育臨床心理コース修了。小学校教員として算数科教育を中心に授業実践を行う。10年ほど実践した際、教科指導を充実させるためにも臨床心理学を学ぶ必要感をもち、ストレスマネジメント教育を中心に研究を開始。北九州市教育委員会との人事交流。専門分野: ストレスマネジメント教育、心理教育プログラム、算数科教育



活動後の振り返りの様子



大学院生による授業導入場面の様子



大学院生によるSSTの授業場面の様子



福岡県教育庁教育振興部義務教育課指導主事の講話の様子

教職大学院で学ぶ

教職大学院の特色は「理論と実践の融合」を具体化しているところです。研究者と実務家(学校での管理職経験者)の大学教員が協働で指導することや、教員経験のある院生と学部卒の院生が机を並べて学ぶことによって実践につながる学びを深めています。

授業の3つの柱

教育実践力開発コース(教員経験のない院生)の必修授業である本授業も、理論と実践を意識した授業としています。生徒指導の本質は授業にあるとの思いから、生徒指導の本質を学びながら、授業力を高めることをねらった欲張りな授業となっています。内容

は、テキストをもとに理論的な背景の理解、心理教育プログラムの演習、院生同士の褒め言葉のシャワーの3つを中心に事例検討も含めながら学んでいきます。

学校での即戦力を育てる

受講する院生は、教員免許を持っている学生です。教壇に立ったつもりで授業に臨むよう、授業の工夫をしています。理論面については、項目ごとに院生が指導内容を考えて20分の時間で授業を実施します。質問等についても、院生が臨機応変に対応しながら進めていきます。その後、大学教員が内容と方法の両面からコメントすると共に、学校での事例を紹介しながら理論と実践の接点を考えさせます。

心理教育プログラムについては、他の院生を児童生徒に見立てて模擬授業形式で実践していきます。この取組では、授業者としての立場だけでなく、受講者の立場にもなることで児童生徒の思いを推察することを体験的に学びます。最後に、褒め言葉のシャワーでは、褒めたものも褒められたものもほんわりとした気持ちになって授業を終えます。この取組は、教員になったとき子ども達のよい面に目をむける習慣になることを意図しています。

教員は大変だといわれる昨今ですが、それ以上に喜びあふれるやりがいのある仕事であることを院生自身が実感してくれたらと願っています。

実証的な方法で、生活科と総合学習について研究する 生活総合教育講座 天野 真二 研究室

この研究室、物理的には27年前から今の位置にあり続けているのですが、生活総合教育講座の天野研究室というのは、まだ2年も経っていません。ですから、生活・総合選修の学生で、この研究室から巣立ったのはまだ1名だけです。彼は、宗像市における「総合的な学習の時間」の実施状況について研究し、この春に卒業していきました。

現在、この研究室に所属している学生は、4年生が3名(写真)、3年生が4名です。4年生はいずれも「総合的な学習の時間」をテーマに卒論を書く予定です。

「総合的な学習の時間」が学校教育現場で本格実施されるようになったのは今世紀に入ってからです。いくら理念としては立派な総合学習であっても、指導する先生の理解が得られなければ実効のないものとなります。先生が興味・関心をもって子供たちに臨めば、総合学習の趣旨は実を結ぶでしょう。これは総合学習に限りません。所属学生には、このような理解を基盤とするような研究をしてもらいたいと考えています。



生 活 総 合 教 育 講 座



生活総合教育講座は今年(平成26年)で6歳になりました。専任教員は3名でその平均年齢は約59歳です。本講座は「生活科」と「総合的な学習の時間」の教育内容と方法に関する授業科目を担当し、同時にこれら2つの領域の研究を行っています。いずれの領域も生まれて間もないので教育と研究いずれも未開拓の部分(比較的)多く、ある意味、やり甲斐のある領域と言えます。

本講座は初等教育教員養成課程の生活・総合選修に所属する学生を中心に指導に当たっており、今年の春にはこの選修の第2期生が巣立って行きました。選修発足当時の定員は5名でしたが現在は10名になりました。少人数のクラスなのでタテ・ヨコのつながりがしっかりしているのが強みです。今のところ小学校教員等の就職状況も良好で、留年や中途退学などは1人も出ておりません。

今後も講座教員全員で学生の指導と研究に全力を尽くす所存です。

アメリカンフットボール部 LIONS

LIONS

私たちアメリカンフットボール部は、部員28名とマネージャー10名の計38名で週5日活動しています。

私たちの目標は、九州2部リーグでの優勝を果たし、1部昇格ならびに1部定着を達成することです。また、部員全員がアメリカンフットボールを大学から始めており、同じスタートラインに立ち、目的意識を持って練習に励んでいます。高校時代にスポーツをしていなかったという人や、何か新しいことを始めたい人には、うってつけのスポーツです。

週2日のオフの日には、筋トレをしたり、勉強やアルバイトをしたり、それぞれが充実した学生生活を送っています。11月から2月までのオフシーズンの間には、部員旅行や小学校でのフラッグフットボール指導のボランティア活動など、練習や試合以外でも幅広く活動を行っているところも、私たちアメリカンフットボール部の魅力だと思います。さらに、例年、教員採用試験や公務員試験、就職活動でも実力を発揮し、文武両道の精神のもと、心身ともに成長することができます。

なお、公式サイト(<http://fuelions.sakura.ne.jp/>)やFacebook、Twitterなどで情報発信も行っています。ぜひ一度ご覧になってみてください。Go! LIONS!!

初等教育教員養成課程学校臨床教育学選修 4年 岡本 啓吾



てくてく とことこ (ボランティアサークル)

「てくてく とことこ」は、自閉症の方を対象としたボランティアサークルです。現在、部員は20名所属しており、小学生1名、高校生1名、大人6名の自閉症の方と一緒に料理を作ったり、バーベキューをしたり、イチゴ狩りに行ったりと、毎月様々な余暇活動を行っています。

自閉症の方はコミュニケーションが難しかったり、独特のこだわりがあったりといった理由で、社会体験が狭まりやすいのが現状です。そのため、活動目的として、余暇活動の幅を広げる、自閉症の方が将来生活していくための基礎となる社会のルールとマナーを学ぶ、環境や活動内容に慣れる、人との上手な関わり方を身につけながら楽しむ、といった4つを設定しています。活動は、自閉症の方1人に対して学生2人がサポートする体制で全て個別に行っており、ひとりひとりにあった方法を考えながら援助していくことにより、お互いが楽しめるような

活動になっています。ぜひ一度、私たちの活動を見に来てください。お待ちしております。

特別支援教育教員養成課程知的障害児教育専攻 2年 猿楽 知子



研究 連携

学校、教育委員会等との連携

福岡教育大学では、学校、教育委員会及びその他の機関・団体との連携事業や共同研究を推進し、その成果を積極的に社会に還元します。

連載第9回 平成24~27年度
独立行政法人科学技術振興機構(JST)受託研究



教職実践講座 小泉 令三 教授

「学校等における犯罪の加害・被害防止のための対人関係能力育成プログラム実装」

「学校等における犯罪の加害・被害防止のための対人関係能力育成プログラム実装」について、より分かりやすくお伝えするために、Q&A形式で解説いたします。



どんな取り組みをしていますか？

SEL-8S(セル・ハチエス) (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at the School)という学習プログラムを、学校と連携して実践し普及を図っています。

SEL-8Sはどんなプログラムですか？

対人関係を中心とした社会的能力を育むことで、規範意識や自尊感情を高めて問題行動を事前に防ぎ(予防)、さらに日常の学習活動を効果的に進めるための基盤をつくる(開発)ことを目指しています。具体的には、発達段階に応じて、例えばあいさつの仕方や、他者の気もちの理解、万引きに誘われたときの断り方などを学んで、5つの基礎的社会的能力と3つの応用的社会的能力を高めます。このために、発達段階に応じた授業案や教材(学習プリント、ポスターなど)を作成し、3冊の本にまとめることができました。教材は大学のホームページでも提供しています。
(<http://www.fue.ac.jp/~koizumi/index.html>)



SEL-8Sプログラムを紹介した図書3冊。第1巻は理論と実践方法、第2巻は小学校の指導案と教材、第3巻は中学校の指導案と教材になっています。

どんな組織で取り組んでいますか？

このプログラムは、2008~2011年度に(独)科学技術振興機構の助成を得て、福岡教育大学、福岡大学、九州大学の3つの研究グループで開発しました。2012年度からは、実際に学校等で使っていたり、普及が進むように努力しています。

どんな学校と連携していますか？

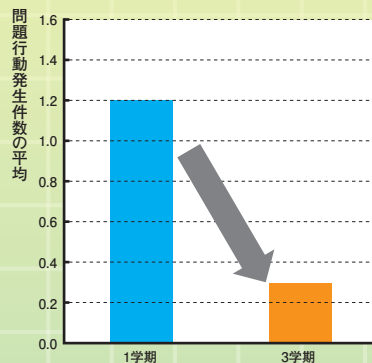
今年度は、福岡県内の18の小中学校が私たちの実践研究会に登録してくださり、連携校として実践を進めています。その他、市町全体で実践を進めている例や、登録されていないけれども、実践に向けて私たちが支援をさせていただいている多数の県内外の学校があります。最近では、県外の特別支援学校での実践の支援も始まりました。

どんな成果がありますか？

実践の結果、連携校では児童生徒の8つの社会的能力や自尊心の向上が見られ、また先生方からは「授業がやりやすくなった」などの声もいただいています。社会的能力が高まると、問題行動の数が減るという結果も得られています。(右図参照)

今後の抱負は何ですか？

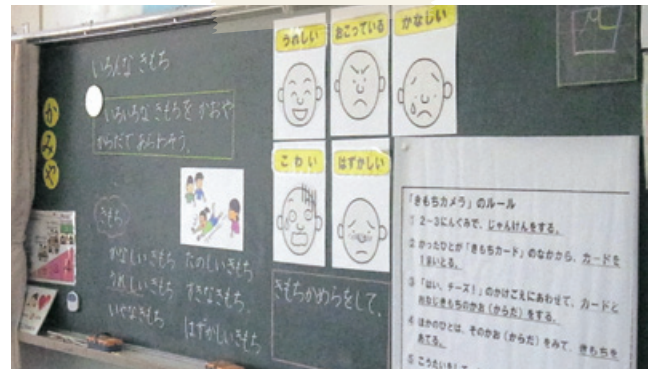
子どもが楽しい学校生活を送れるようになってくれることが願いです。そのために、このプログラムを利用していただいて、子どもたちのコミュニケーション力や他の人と関わる力が豊かになって欲しいと思います。そうした基盤ができれば、先生方の日々の教育活動が効果的になるのは間違いありません。



社会的能力(教師による評定)が向上した学級(小3~中3)での問題行動発生件数の減少



小学校でのSEL-8Sプログラムの授業風景です。1年生が気持ちの違いによって体のようすや表情が異なることを学習しています。



左の小学校1年生の「いろいろな気持ち」という感情理解の学習の板書です。「きもちカメラ」というゲームを通して代表的な感情の理解を進めていきます。



4年生の「みんなであからを合わせて」の板書です。南極探検に行くとしたら何を持っていくかをグループで決めるという活動で、他の人の話の聞き方や、話し合いのルールを確認しています。



各連携協力校の推進役である「コーディネーターの教員」の研修会の様子です。年に1度、福岡教育大学に集まっていたり、取組の実践発表を聞いていただくとともに、工夫点、成果、今後の課題などを参加者が共有する機会となっています。



これから実践を開始したいという先生方を対象にした研修会の様子です。今年は2回で1セットの研修会を2セット開催し、県外からも多数の参加者がありました。

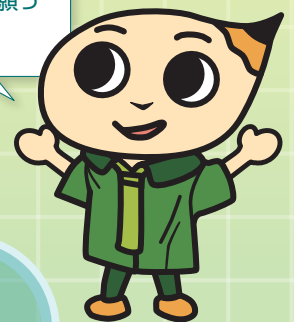


本年8月に開かれた田川市教育研究集会で、参加された市内の小中学校の先生方全員を対象に、SEL-8Sを紹介させていただきました。田川市内での実践も始まっています。



中学校ブロック(3小1中)合同のSEL-8S研修会の様です。中学校のコーディネーター的教員がリードして下さり、ワークショップ形式の大変有意義な研修の場となりました。

今後、さらにSEL-8Sの普及が進み、実践校が増えることによってたくさんのお子たちが楽しい学校生活を送れるようになってくれることを願っています!





北九州市立高須小学校
 さいとう ゆりえ
 教諭 齋藤 由梨絵さん
 平成24年3月
 初等教育教員養成課程 教育心理学選修卒業



算数の授業風景

「報告・連絡・相談」の大切さ

福教大生のみなさん、学生生活を満喫していますか？

講義にレポート、演習に実習、アルバイトも…。サークルにも行きたい遊びたいし、忙しい。先生になったらもっと忙しいのかなあ。

私は学生時代、よくそんなことを考えていました。確かに先生って、ものすごく忙しいです。でも、その忙しさを上回る達成感、喜びを味わえます。休日はしっかり友達と遊んでいるし、本当に、この職業に就いて良かったと感じています。

教職に就いた初めの1年間は、見通しの立て方すらわかりませんでした。でも、「誰でも最初はそうだから大丈夫」と先生たちから励まされ、1年間もがきながら、必死に周りの先生たちについていった結果、2日目からはとても計画が立てやすくなりました。

「報告・連絡・相談」これが、私を助けてくれています。不安がよぎればすぐに同学年の先生や管理職の先生のもとへ。放課後の何気ないおしゃべりも大切です。

毎週、同学年の先生と1週間分の計画を立て、必要な教材をできるだけ早めに準備します。子どもにとって、毎日が初めての学習です。その日のうちにすべてを理解するなんて、難しいのは当たり前。隙間時間に学習の補充をし、毎日手作りの宿題で復習できるようにしています。慣れてくると楽しいですよ。

こんな楽しみがあります

学校では、たくさんの行事があります。運動会のダンスを考えたり、学芸会で劇や合奏、ピアノ伴奏の練習をしたりと、大変なことは多いですが、子どものがんばりと当日の発表を見ると、辛さなんて吹き飛びます。

普段の生活では、たわいない子どもとの会話が、自然と私に元気を与えてくれます。昼休みには週に1度、クラス全員で外に出てケイドロやドッジボールをしています。その時には子どもから体力を奪われます。掃除時間は汗だくですね。

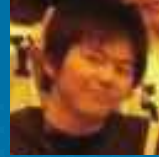
学生のみなさんは、ポーっと考えているより、「実践あるのみ!」です。たくさん遊んで、たくさん実践してください。すべての経験が、職に就いたとき、必ず自分を助けてくれるはず。ぜひ、一緒に先生として働きませんか?楽しみに待っています。



学生時代(サークルの仲間と共に)



社会の授業風景



福岡県立福岡中央高等学校
ないとう こうじ
教諭 内藤 浩二さん

平成25年3月

中等教育教員養成課程 数学専攻卒業



授業風景

教員生活2年目がスタートし、半年が過ぎました。昨年1年間は教員として右も左もわからない状態でしたが、先輩の先生方に様々な形で支えていただき、とても充実した1年間を過ごすことができました。今年は、担任として昨年を超える充実した日々を過ごし、生徒とともに成長していきたいと思えます。

教員になってよかった!

早朝から正門での挨拶、朝課外、通常授業、昼休みや空いた時間には課題の添削や生徒の相談に応じ、放課後は部活動、生徒が下校した後やっと自分の仕事を行う毎日が続いています。土日祝日は部活動の練習や対外試合と多忙であるため、平日に少しでも時間が取れるように自分の仕事を行っています。しかし、辛いというよりも教師になってよかった!と思うことの方が多くあります。生徒が「今日の授業わかりました。」と言ってくれることはもちろんですが、課題の最後に書いてくれるコメント、クラス一丸となって様々な活動に取り組む姿、クラスの生徒たちが楽しそうに話している姿など、生徒にとっては何気ないことなのですが、私にとってはまた頑張ろうと思える力の源になります。本当に教員になってよかったと思えます。

目の前の生徒を変えてなんぼ!

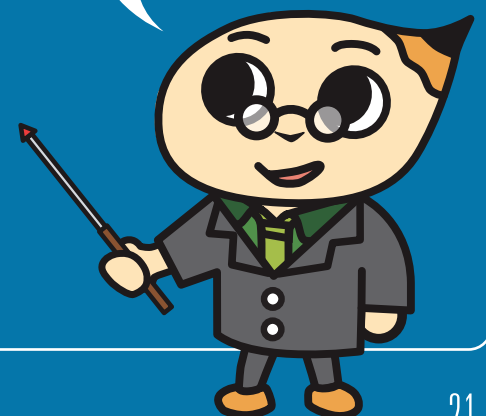
「人生に失敗はない。あるのは成功と経験だけだ。」私は、大学生活でミニバスケットボールのコーチ、サークルでのキャプテン、中等数学科では様々な企画を行うなど多彩な経験をしました。この経験の中で出会った方々、同じ専攻の友人、先輩方、後輩たちには本当に感謝しています。このすべての経験が私の現在の教員生活の原点です。だからこそみなさんには様々なことを経験してほしいと思います。それはどんなことでもかまいません。始めるきっかけは必要ありません。何かしたいことがあるのなら今すぐ始めてください。しかし、やるからには手を抜かず、ぶつかることを恐れず、自分の信念を貫き通してください。その中で経験したことが自分の将来につながるものです。そして、その経験を生徒に伝えてください。それが生徒に最も伝わるものであり、生徒を変えることのできるものです。



学生時代(大学祭にて)

忙しい日々の中で、充実した教師生活を送っている齋藤さんと内藤さん。今後の更なるご活躍を応援しています。

先輩が活躍する姿は、教職を目指す在学生の皆さんにとって、教師という夢への心強い後押しとなることでしょう。学生の皆さんには4年間という限られた時間の中で様々な経験を積み、より充実した学生生活を送ってほしいと思います。



東京オリンピック・パラリンピック競技大会 組織委員会と連携協定を結びました!

このたび本学は、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向け、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と連携協定を締結しました。

去る6月23日(月)に早稲田大学で開催された連携協定締結式に学長の代理として平田副学長が出席し、協定書を取り交わしました。

本学は、オリンピック教育の推進、広報活動等、教員養成を担う九州の拠点大学として、学校教育の充実・振興を通じて、大会成功へ向け取り組んでいきます。



表紙モデルの福教大生☆



おく みつき
左 奥 美月さん

初等教育教員養成課程
数学選修2年

し れん かな
右 枝連 加奈さん

初等教育教員養成課程
数学選修2年

今号の表紙撮影では、宗像市立日の里西小学校で学習支援ボランティア活動を行っている学生さん取材しました。

奥さんと枝連さんは、1年生の時に先輩から小学校での学習支援ボランティアの話聞き、昨年の後期から授業の空き時間を利用してボランティア活動を始めました。現在は週に1度、1年生から6年生までのクラスに授業の補助として入り、学習支援を行っています。

学習支援ボランティアを始めてから、教師という仕事の大変さを改めて実感するとともに、絶対に教師になりたいという思いが強くなったという奥さんと枝連さん。「いつも子どもたちからたくさんの元気をもらっています。今後は、日の里西小学校での学習支援ボランティア活動を続けながら、特別支援学校等でのボランティアにも参加したいと考えています。」と笑顔で話をしてくれました。

福岡教育大学はボランティア活動に参加したい学生さんを応援しています。

ボランティアを始めたい方は、ぜひ本学のボランティアサポートシステム(VSS)をご活用ください。また、学生支援課での相談も受け付けておりますのでお気軽にご相談ください。



福岡教育大学ボランティアサポートシステム
<https://volncare.fukuoka-edu.ac.jp/index.html>



学生広報スタッフ大募集

大学や学生情報のアイデア提供、広報誌の取材・写真撮影、ポスター・ホームページのモデル、大学ホームページのモニター、制作への参加、その他大学の広報活動全般に関わってみませんか?

詳細は担当者までお気軽にお問い合わせください。

福岡教育大学の魅力を高校生・受験生をはじめ、地域の皆さまに知ってもらうために、広報・広告活動にボランティアとして参加・協力してくれる福教大生を大募集!
みなさんの応募をお待ちしています!



●応募方法等

メールで、本文に以下の3項目を記載の上、応募してください。

1.所属・学年 2.氏名(ふりがな) 3.連絡先(電話番号・e-mail)

受付後、こちらから連絡します。

なお、応募者多数の場合は、選考の上、結果を連絡します。

●応募先・問い合わせ先

経営政策課 梅田

TEL. 0940-35-1205

e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp



キャンパスからの便り

Campus letter

同窓会 城山会

じょうやま

城山会県立学校・高等学校支会総会報告

城山会県立学校・高等学校支会総会が8月16日(土)に福岡市博多区ホテルクリオコート博多で開催されました。

ご来賓として大学より学長はじめ理事兼副学長2名のご臨席を賜り、若い会員も含め約76名が集いました。同窓の絆を深めた意義ある支会総会でした。



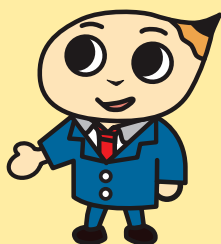
平成26年度 新卒・若手会員情報交換会 (ホームカミングデー) 報告

同窓会城山会は、10月11日(土)アカデミックホールで新卒・若手会員情報交換会(ホームカミングデー)を大学との共催で開催いたしました。

開会式で榑崎理事と伊藤副理事より大学説明をいただき、実践発表は、小学校、中学校、特別支援学校より各1名、それぞれが個性あるすばらしい発表でした。谷副会長(教職大学院講師)より指導・助言をいただき、昼食後、共通講義棟4教室で地区別情報交換会を行いました。参加者は総数140名。新卒会員と先輩会員との交流も図られ有意義な会でした。



同窓会城山会事務局
TEL・FAX: 0940-33-2211
e-mail: jouyamakai@able.ocn.ne.jp



後援会

平成26年度保護者説明会のご報告

今年度の県外での保護者説明会は、6月14日の長崎から始まり、熊本、大分、広島と行いました。大学より就職、履修、学生生活についての説明の後、学年毎に分かれての茶話会をしました。茶話会では保護者の情報交換や質問があり、参加者にはとても好評でした。

来年は、佐賀、鹿児島、宮崎、山口と計画をしています。ぜひご参加ください。



後援会事務局
TEL・FAX: 0940-33-8070
e-mail: kouenkai@eos.ocn.ne.jp

健康科学センター

MESSAGE No.108 2014秋号

今回の内容は、「レポート・プレゼンテーションのコツ」、「福岡教育大学通学・通勤道路の生体負担と運動のすすめ」、「やがて、職業人として巣立っていく学生の皆さんへ」、「じぶんのきもちに耳を傾けること」、「悩み方のヒント」、「日々の気がかりをどうしていますか?」、「感染症の話」、「アートセラピーワークショップ」、「お花を育てる会」など盛りだくさんです。また表紙は中等美術専攻の中原久美子さんのデザインです。是非手にとってご覧ください。



健康科学センターHP
<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/~hokenctr/index.html>

Joyama 通信 vol. 31



福岡教育大学
イメージキャラクター
フッキー

福岡教育大学広報誌第31号

2014年11月21日

編集発行: 国立大学法人 福岡教育大学
経営政策課

〒811-4192 宗像市赤間文教町1-1

TEL.0940-35-1205

FAX.0940-35-1259

e-mail: kouhou@fukuoka-edu.ac.jp

ホームページ:

<http://www.fukuoka-edu.ac.jp/>



携帯電話サイト



Twitter



YouTube

編集後記

■本号の特集1「大学改革」では、学生の英語力向上のための新たな取り組みについて紹介しました。学校現場で実践可能な英語コミュニケーション能力を身につけた教員を養成するため、今後更に充実したプログラムを提供し、学生の英語力向上に向けた取り組みを進めていきます。特集2では、10月にリニューアルオープンした図書館を紹介しました。学外の方でも資料の閲覧や貸出、複写のほか、子ども図書室などをご利用いただけます。新機能満載の図書館にぜひご来館ください。

(広報編集部)

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。